



新式圖書 上

冊數	書名	函號	部類
二	新式圖書	二 一 一 六	連歌俳諧

伊地知文庫
 文庫20
 126
 1



文庫20
126



鷹司城南
館圖書印



伊地知氏書冊

豹の字
く文字
宮に
を梅
本奇
一花
あとも
杜
女
常
郭
烟

一物乃名
口梅
七水室
十花
立源氏物
去
光
立牡丹
立梅
立呼子鳥
立
立

二河
又
八
土竹
古
七
廿
立
立
立
立
立
立

渡邊千枝藏

六
九
十二
十五
十八
廿
廿七
三十
卅三
卅六

冬	頁七	切木	頁十三	山乃文	頁十三
蕨	頁七	林	頁十八	園	頁十六
藪	頁七	竹	頁十九	心乃松	頁十九
心乃松	頁七	苗代	頁二十	下前	頁二十三
冬積の芦	頁七	浮流	頁二十一	人偏	頁二十六
老	頁七	石	頁二十二	費	頁二十九
救生	頁七	彈	頁二十三	一	頁二十九
は	頁七	忍	頁二十四	の	頁二十九
		恨	頁二十五	銭	頁二十九
			頁二十六		頁二十九

圖書

連歌新式追加并新式今案等

一連歌ハ身より心へ始ると云然るも伊特冊伊特深
 なる天の浮橋乃りとも始ると云合の時ありけり云
 やうゆすし女よあひむとの終り伊特深なるあれれ
 一もえやうまゆ 男にあひむと終り是は女終
 男終の境なりとも是と連歌終始ともなるも
 日本記は天の浮橋なりとも女終より男終よりと
 終り陸陽乃道らうとも男終より浮橋を廻ると
 て男終より終り女終より終ると云天は浮橋
 と云夫よの事ありけり日本記より番足より其
 後未だ終るなり云云乃云云あり終り文終

宛合く八月の月、白きより福をすくむに
新式と申すより世々三月に申すに山神とて喜白
り連歌と云ふは是は、御年徳と一板の喜白
不書して二乃喜と稱をも傳わらぬと余は打を
面斗に申す以上は、好く百韻を世々は是と喜白と
云也八月の月、天孫出現をたゞは依て口を述べし
とありは、白く申すより喜白と云ふは、新式乃起す水
依るは、双紙と云ふ物とて、後菅光園は、世々乃
十七ヶ條、月、今、新式は、子、世々に不
く天孫老翁と稱して、折紙をよむとて、し
るは、世々も、老翁の瑞る所を、徳を
を付るも、山神の變り、入るは、依て、天孫の

山神とて、知るは、是時の新式折紙、山神とて、
少神の、折紙、今、建、折紙、今、
二年、折紙、今、折紙、今、
良、折紙、今、折紙、今、
十年、折紙、今、折紙、今、
折紙、今、折紙、今、

四代三條院
中法

折紙、今、折紙、今、
折紙、今、折紙、今、
折紙、今、折紙、今、
折紙、今、折紙、今、

宛合く八月の月、文白書より福をすまへし和原の
新式と云ふ式より世々へん三月に山神にて喜白
の連歌と云ふことあり是ハ物年徳と一板の喜白
不書して二乃喜と稱をも備わらぬと余は打書と
面斗にきて以上ハ板より百部と云ふこと是を喜白と
云也八月に天竺出現と云ふは依て口を従せしと
しあつば板より口より喜白と云ふ新式乃起す水
依り此双紙と云物と云後喜光園代出他は是子乃
十七ヶ條月々新式は是子乃世々に不坐
く天竺老翁と現して折函より出さして下りし
際より世よりあらまらるる老翁の瑞る所を徳書
を付るべき事しよ山神の變原より入るより依て天竺の

山神と云ふは是の時の新式折函より出さるる
少跡の痕跡より云々して連歌此中より九中
二年斗後意ある年壬子歲新式と云は撰しとあり
良基此山神の意あり天正九年丁亥と云ふ九百
八十年に後喜光園始に後福光と書は喜光
琴入形より園代院と字乃仙之良基の後喜光園代
乃内山神也

一園白と云ふ書は二条後九条後一条後皆一人にて
二年花持形より皆一人と云は撰しとあり大に後喜光
園代良基と云は花持形より皆一人と云は撰しとあり
之後こそわらるる書

以上は白書と云は撰しとあり

てよをそそのこと也 霜新梅麻と昔の梅と

一物たぬと物ぬと極赤餅時ぬ夕々暮ると梅とを代
ふ極く張ハよのふと物たぬれと

あふよちりぬちたあふふ

いのちあくる新のちふゆ

いく夜路のちん村時ぬ

山風乃くさくを記ク夕暮

の氏赤巻とを竹句をも極しい新或乃定也 物た
直前の山書よ時ぬ夕々暮ると梅とを代と極

とまふ極くし

一詞乃字とはてよをそそれ事しはきうりるん
ちて得乃字とちてぬ氏赤巻と極赤餅はち下

句もあつ上句よを百物よちく申こよふ二句を

ちりあう上句よ不極けけりあう上句よ二句下

の句よ二句百物よちりあうあうあうあうあう

他上の句よ西よちちていふ下下句のきああう

やう氏赤巻とを竹句もあうけ思たあうちてきう

一とあういふ百物二句上あうちてよをそそあう

源氏物たぬはちう物たぬれ二句をよそぬ

んを西よちちてぬぬんよぬぬぬぬぬぬぬぬ

ハ西よちちり西よちちり二句をよそぬ

あう百物よ二句をぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

一是も二句あふぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

き一あう百物よ二句らんらんらんらんらんらん

申こよふ二句を

らんていふ人との貴族を入る一海心入のま
と志がとくえり 初海心と一入海心此れとも又

^{古今}常盤なる松のこころとまき見れは今一入此れも海心

一海心と付しはこころとまき字移りなり

見しはこころとまき字移りなり

常盤山神原花と一秋文て

佳乃字と海心字は心とまきなり此れ海心とまき

とまきとこころとまきと分て又海心とまきとまき

とまきとこころとまきと分て

一海心とまきと分てと書する昔人をうらむまの

了しと海心とまきと分てと書する昔人をうらむまの

海心他ヨモカシとまきと分てと書する昔人をうらむまの

是を新傷と武の右小岸電流の海新松竹柳

とまきとまきと分てと書する昔人をうらむまの

一しと松のこころとまきと分てと書する昔人をうらむまの

海心とまきと分てと書する昔人をうらむまの

海心とまきと分てと書する昔人をうらむまの

一しと松のこころとまきと分てと書する昔人をうらむまの

海心とまきと分てと書する昔人をうらむまの

海心とまきと分てと書する昔人をうらむまの

又常盤とまきと分てと書する昔人をうらむまの

海心とまきと分てと書する昔人をうらむまの

あり付と云ふは月を分るは月と云ふは隠れ花
し月を分るはあり付と云ふは付付と云ふは
その理を分るは心と云ふは物と云ふは
昔は月を分るはあり付と云ふは又云ふは
思ふは思ふと云ふは知るは知る
と云ふは揚子江の舟と云ふは天台宗の
おのののの

十一 花を痛む也

暇を記と云ふは月を分るは月と云ふは
と云ふはあり付と云ふはあり付と云ふは
と云ふはあり付と云ふはあり付と云ふは
と云ふはあり付と云ふはあり付と云ふは
と云ふはあり付と云ふはあり付と云ふは

又乃打よ

花を痛むは花を痛むは花を痛むは
花を痛むは花を痛むは花を痛むは
花を痛むは花を痛むは花を痛むは

花を痛むは花を痛むは花を痛むは
花を痛むは花を痛むは花を痛むは
花を痛むは花を痛むは花を痛むは

花を痛むは花を痛むは花を痛むは
花を痛むは花を痛むは花を痛むは
花を痛むは花を痛むは花を痛むは

花を痛むは花を痛むは花を痛むは
花を痛むは花を痛むは花を痛むは
花を痛むは花を痛むは花を痛むは

之飛可也よはらふ又花のうよ

朝陽をけしめりて思ふこと又まてれり

舟面もあらぬ色乃時りしは西新似るる

二層のふり

十一

花のけりし風を流り流るる水は流るる水は流るる

しと云用け候も程守新成る是に今案此詞は

はるいよまわらむとせしむと云ひてけり

十二

竹と云ふに世とて又懐希とて思て秋字も

ゆひの敷又を懐とて思別竹は世にけりし

亦乃毎事書し世故ある竹とけりし

表はしめる世の中は

しるの竹とてけりし

情人のうよは新をころとて

熱別意函信をけりし乃をと張羽書しころとて

けりしころとて二夜出らるる是を懐也

十三

中言のうよ

言よふに後中説物語同く中説のうよ

鑑ちるに此事は漢より海原をけりし

又けりしとて中説と云ふは日本記出を

乃ゆも何と奇れとて之をよふ

古今後撰拾遺に但述あり

月よ心とてひれり

月よ心とてひれり

月よ心とてひれり

不後舉一隅并扣三端三角隅形三角又守二字一亦
无守舉一隅と云る中心三角隅物と隅ありれん此
二隅とあると句のしつ隅中ありと句の意
ありと云ふは余不教と云ふは或終つ隅と云
極のりししと句の意乎此句隅とありと云ふ
る旨能く伝へるしと句の意と他つれ一白
此物と句のしつ載るる終つ隅と句のしつ
一尤物と云ふは此物と云ふは白氏文集と云ふ也
好乃字と云ふは此物と云ふは

白氏文集十八卷と云ふは 白集天の他とす
既述の寸三の書は亦や極物と云ふは寸三
乃情と云ふは情と云ふは是の情と云ふは

よく通ずる漢書と云ふは常と云ふは是の意なり
都と云ふは都と云ふは是の意なり
乃と云ふは乃と云ふは是の意なり
と云ふはと云ふは是の意なり
乃と云ふは乃と云ふは是の意なり
と云ふはと云ふは是の意なり
乃と云ふは乃と云ふは是の意なり
と云ふはと云ふは是の意なり

十七

裁判と云ふは
と云ふはと云ふは七種と云ふは
并み裁判と云ふは田平子併のた
と云ふはと云ふはと云ふは

之痛の山替と云ふは

み葉の下後白よせい三日七ころ限又あはれりとする
あり平白のいりり中いすとして二日とるの葉
常とるのふれとあつるあはれり申し芥と成
葉摘い喜し故葉摘難し海草ゆりし唯葉
つゝとつゝとつゝとつゝとつゝと

夫らわきのせあつてこの葉摘

こゆりの故葉摘 故葉摘きあつては汁とるれり

こゆりの故葉摘のあし

一十九一六
檜摘花つじあつての日に一ツ合掃とるあつて百部二ツ
あつて云字抽れよつちつてあつてはよつちあつて
新あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
林くあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

字に二つあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

一廿

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

一廿

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

外に此歌を分てより一花をさすひ解し行ふて能く
又も様々なる一花を解と分れてそのあふれぬこと
一花よぬれなる花乃り夕べか
と云ふなり
西より夕べの光りなる花は
字は字は
始くまを此時より分るをせしむ一入應は
あつたれよりまねく

一六
捨るは山花のこころは
三編の山花のこころは
山花のこころは

一七
捨るは山花のこころは
捨るは山花のこころは
捨るは山花のこころは

一八
捨るは山花のこころは
捨るは山花のこころは
捨るは山花のこころは

一九
捨るは山花のこころは
捨るは山花のこころは
捨るは山花のこころは

二〇
捨るは山花のこころは
捨るは山花のこころは
捨るは山花のこころは

この中よきし一處せぬかへ海山はきん
鳥をきこるやのきこるを思ふ事こころしき
多し是よりふれよこころしすしこし正神石を
とらふ也

きこれし世をいふ人のきこるを思ふ事こころし
是れ神子とよめるけり

きこるはきこるを思ふ事こころし
山川のぬみ井たよのきこるを思ふ事こころし

是れ神子とよめるけり
とらふ事思ふ事こころし

白鳥をいふ事思ふ事こころし

中庭のちのやうに

えいこはぬるを思ふ事こころし

きこるはきこるを思ふ事こころし

あそびを思ふ事こころし

始く上居れ時はおもひを思ふ事こころし

名をいふ人乃たかくは思ふ事こころし

又新報を人の思ふ事こころし

また新報を思ふ事こころし

都の都乃國の王はきこるを思ふ事こころし
石の都乃國の王はきこるを思ふ事こころし

愛して杜鶴と加えしと石の都乃國の王は
大に思ふ事こころし

人たきこるを思ふ事こころし

又申す事例は他宗よりある

又申胤最と云其宗子幼れ家に入ておるをいふ

く宗をたよりしすも蒙取らるる源氏也と云

乃其宗と幼れ家の人と云らるるをいふ

幼れ宗と云は海老と云はるるをいふ

一三

源氏に傳へし物異なりしをいふ

いふは宗の宗子なりしをいふ

く其宗の宗子なりしをいふ

源氏に傳へし物異なりしをいふ

源氏に傳へし物異なりしをいふ

源氏に傳へし物異なりしをいふ

源氏に傳へし物異なりしをいふ

源氏に傳へし物異なりしをいふ

源氏に傳へし物異なりしをいふ

源氏に傳へし物異なりしをいふ

源氏に傳へし物異なりしをいふ

源氏に傳へし物異なりしをいふ

源氏に傳へし物異なりしをいふ

一四

源氏に傳へし物異なりしをいふ

源氏に傳へし物異なりしをいふ

源氏に傳へし物異なりしをいふ

源氏に傳へし物異なりしをいふ

一五

源氏に傳へし物異なりしをいふ

源氏に傳へし物異なりしをいふ

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

おと屋又まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

一 珍書前よりよるまよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

一 珍書前よりよるまよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

まよふもしおれ字にむらさきのまよしおと屋

一

又狐の虎に威をうけしるるの事ありて又虎とて虎を捕
つる事一難事なり虎の爪のよりにて狐を捕らざるも
日本乃百の難事なり不審なりと多虎を捕らざるも
あつたり又狐とて虎を捕らざるも虎を捕らざるも
虎を捕らざるも虎を捕らざるも虎を捕らざるも
虎乃威をうけしるる事ありて又狐とて虎を捕らざるも
狐を捕らざるも虎を捕らざるも

一

一 狐の虎に威をうけしるるの事ありて又虎とて虎を捕
つる事一難事なり虎の爪のよりにて狐を捕らざるも
日本乃百の難事なり不審なりと多虎を捕らざるも
あつたり又狐とて虎を捕らざるも虎を捕らざるも
虎を捕らざるも虎を捕らざるも虎を捕らざるも
虎乃威をうけしるる事ありて又狐とて虎を捕らざるも
狐を捕らざるも虎を捕らざるも

虎乃威をうけしるるの事ありて又狐とて虎を捕らざるも
狐を捕らざるも虎を捕らざるも虎を捕らざるも
虎乃威をうけしるるの事ありて又狐とて虎を捕らざるも
狐を捕らざるも虎を捕らざるも

是の女乃事之集はまの鬼と人乃淫肉のりる
と云はるる 采るれは此鬼にせぬ物と鬼とを二日
くひてりる 是もあつはるる思ふと云はれ下は
あつはるる 是もあつはるる 思ふと云はれ下は
あつはるる 是もあつはるる 思ふと云はれ下は
あつはるる 是もあつはるる 思ふと云はれ下は
あつはるる 是もあつはるる 思ふと云はれ下は
あつはるる 是もあつはるる 思ふと云はれ下は
あつはるる 是もあつはるる 思ふと云はれ下は
あつはるる 是もあつはるる 思ふと云はれ下は
あつはるる 是もあつはるる 思ふと云はれ下は
あつはるる 是もあつはるる 思ふと云はれ下は
あつはるる 是もあつはるる 思ふと云はれ下は

一 早六 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる
一 早七 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる
一 早八 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる
一 早九 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる
一 早十 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる
一 早十一 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる
一 早十二 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる
一 早十三 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる
一 早十四 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる
一 早十五 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる
一 早十六 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる
一 早十七 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる
一 早十八 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる
一 早十九 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる
一 早二十 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる 夕暮るる

一 異父兄弟の如く白く平らな山に高く高く塔を建てて
一 意をなしてはなすにやまの山はたな海に
七 日(七)の如くはたな海に
いふはたな海にたな海に
いふはたな海にたな海に
いふはたな海にたな海に
いふはたな海にたな海に

一 半 村の如くはたな海にたな海に

一 雨降ればたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に

いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に

いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に

いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に

いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に
いふはたな海にたな海にたな海にたな海に

能く言ひて高木此戸の月と名刺と

一 幸子田島は徳のちせは秋之権柄より百之名麻

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

乃そ世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

山田の傍に於て是れ也

小山田の傍に於て是れ也

又麻中は世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

一 幸子田島は徳のちせは秋之権柄より百之名麻

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

一 幸子田島は徳のちせは秋之権柄より百之名麻

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

と云ふは世に母代とも踏てまゝ又花は幸子

乃行くともおもむきと日あつたあつた歎かた
たあつたおもむきと日あつたあつた歎かた
たあつたおもむきと日あつたあつた歎かた
たあつたおもむきと日あつたあつた歎かた

一 春の如く武たつた

馬一物形を結し 踏踏いさるる乃くはるる
二句去くしる物にさるる乃くはるる
物にさるる乃くはるる乃くはるる
物にさるる乃くはるる乃くはるる

物にさるる乃くはるる乃くはるる

清見の清乃り物にさるる乃くはるる
文章 業書白駒景朗詠 九月盡の詩を
詩乃心の秋乃り物にさるる乃くはるる
物にさるる乃くはるる乃くはるる
物にさるる乃くはるる乃くはるる
物にさるる乃くはるる乃くはるる

一 卒

卒 卒 卒 卒 卒 卒 卒 卒 卒 卒

利れつゝを焼くを意あり
と云ふ此教
愚乃白く教あり

あそれ福ありを
解あり我時を

字なきれを焼く如く
ありを焼くまわす
世乃時地を
と云ふ世を
金世世樹の花乃

幸
一代と代とを
いふ乃大なるめ代を
を世代から

はしりたるあり
神乃代といふ
代といふ
七代世外
代といふ
と云ふ
一
書風

あゝ字あゝあゝ

喜波乃神のまじけさ
なまじけさ
なまじけさ

一 ^{七三} 喜波乃神のまじけさ

一 ^{七三} 風乃喜波乃神のまじけさ
秋風おれんは秋風をたしは秋風をたしは秋風をたしは
とこの内へ吹くまじけさ
風乃喜波乃神のまじけさ
なまじけさ

一 ^{七三}

一 ^{七三} 月乃喜波乃神のまじけさ
なまじけさ
なまじけさ

一 ^{七三} 月乃喜波乃神のまじけさ
なまじけさ
なまじけさ

なまじけさ

なまじけさ

一 ^{七三}

一 ^{七三} 夕乃喜波乃神のまじけさ
なまじけさ
なまじけさ

一書 四ツ内に入余入りゆりけり
 一書 今自二日し令中せり
 一書 店三番と云ふ
 一書 〓家田
 〓乃任
 〓乃任
 〓乃任

一書

〓乃任
 〓乃任
 〓乃任

〓乃任
 〓乃任
 〓乃任

し船を山城の川を日笠山に大木とあり
斤島の四井若木乃地とて斤をこれに作とて
か産乃ある斤を平八の作と傳て此も斤島
山太わるとして産を産を油とてとて

本寺ありてりく斤を山城の川を日笠山に大木とあり
産ありてりく斤を山城の川を日笠山に大木とあり

いふことなる大木とありてりく斤を山城の川を日笠山に大木とあり

ひらりてりく斤を山城の川を日笠山に大木とあり

一 池は山城の川を日笠山に大木とあり

は山城の川を日笠山に大木とあり

一 湊田の川の海へ流れ入りてりく斤を山城の川を日笠山に大木とあり

まてりく斤を山城の川を日笠山に大木とあり

是五月の辰を日笠山に大木とあり

一 岩と一橋と一橋乃ちりてりく斤を山城の川を日笠山に大木とあり

名産とてりく斤を山城の川を日笠山に大木とあり

一 産と一橋と一橋乃ちりてりく斤を山城の川を日笠山に大木とあり

字より書き移すに於て花を以て其花を以て
花より書き移すに於て花を以て其花を以て
花より書き移すに於て花を以て其花を以て
花より書き移すに於て花を以て其花を以て
花より書き移すに於て花を以て其花を以て

一 猪め武一神より云々して一城川流の百首猪を以て
みりて 飛件

猪め武一神より云々して一城川流の百首猪を以て
みりて 飛件
猪め武一神より云々して一城川流の百首猪を以て
みりて 飛件

山形

一 猪乃字武二云々して花の猪抗を極まると云

猪乃字武二云々して花の猪抗を極まると云
猪乃字武二云々して花の猪抗を極まると云
猪乃字武二云々して花の猪抗を極まると云

猪乃字武二云々して花の猪抗を極まると云
猪乃字武二云々して花の猪抗を極まると云
猪乃字武二云々して花の猪抗を極まると云

猪乃字武二云々して花の猪抗を極まると云
猪乃字武二云々して花の猪抗を極まると云
猪乃字武二云々して花の猪抗を極まると云

一 猪乃字武二云々して花の猪抗を極まると云
猪乃字武二云々して花の猪抗を極まると云
猪乃字武二云々して花の猪抗を極まると云

一七 老人傳の事は一山二こといふ事未だなくして古徳に
在りて言ふに言ふ事と云ふ語に於ての事と云ふ也吾
らもせし事言ふ事なり 杉老のつくる古徳同の
ありて言ふ事一山の由れ言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事
年一を言ふ事と云ふ事

一六 男武うらゝ男たしと云ふ事又二月文殿に桂木と云
ふ事内より位を極男と云ふ事勿海木と云ふ事
ありて言ふ事一杉と云ふ事と云ふ事と云ふ事 杉老言ふ事
夫れ古木と云ふ事同の事二此内万方と云ふ事

一五 多路山田乃田又いぬ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事
杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事
杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事

杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事
杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事

判曰 莫うと云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事
杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事
杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事
杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事
杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事

杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事
杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事 杉老言ふ事と云ふ事

たのき 任名の神代抄より 源氏物語と云ふれ又書
し古令れ書出の美代のよき物と云ふ神代抄
亮と云ふれしと云ふ神代抄と云ふ書
より云ふ神代抄より云ふ神代抄と云ふ書
乃より神代抄より云ふ神代抄と云ふ書
神代抄より云ふ神代抄と云ふ書
神代抄より云ふ神代抄と云ふ書
神代抄より云ふ神代抄と云ふ書

一 皇乃字ニ云フ云云 皇乃字ニ云フ云云 皇乃字ニ云フ云云

乃切し云ふ云云 乃切し云ふ云云 乃切し云ふ云云

一 根云云云云 根云云云云 根云云云云

面云云云云 面云云云云 面云云云云

一 雑

一 け魚秋ニ云フ云云 け魚秋ニ云フ云云 け魚秋ニ云フ云云

乃切し云ふ云云 乃切し云ふ云云 乃切し云ふ云云

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

一 稗史のつれづれ

也し御座る事なごし申す。此の御座る事なごし申す。

一石
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。
ハ意をなごし申す。此の御座る事なごし申す。
ちやいよと申す。此の御座る事なごし申す。
乃心し申す。此の御座る事なごし申す。

玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。

す。此の御座る事なごし申す。此の御座る事なごし申す。
此の御座る事なごし申す。此の御座る事なごし申す。
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。

一石
指しは外お花をとりて申す。此の御座る事なごし申す。
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。
玉乃法一命一鬼と命と法とを執られたる事なごし申す。

一石
指しは外お花をとりて申す。此の御座る事なごし申す。

とあせりてきて大のわらへて他事を持ておとす
名もき教もせぬ人志も人時多しし
此吹るひももとの風神よりさるふ
娘いももせもれみ姑

古今 此門よりさるふもれみ姑
いふ 此門よりさるふもれみ姑
稲庭とてもこの稲庭とて云稲乃内
の稲庭とてもこの稲庭とて云稲乃内

秋の田はう稲の産はる處月名れ
又いふ所の事

一頁
蓋の二つたれとてさるふもれみ姑

中乃事くはせもれみ姑

世といひもれみ姑

あつちもれみ姑

事御風物もれみ姑

意とさるふもれみ姑

一頁
法は令乃法は令乃法は令乃

法は令乃法は令乃法は令乃

てさ湖^{ヒラウミ}なれりや

一頁 野邊ニク
小野田

小野田の村場乃と世にわたりたがれり山形
せりあふくんとく大平地と又准多は屋敷の地
の岸に電同の山せりたあつて信方大平地
ううあつて西をせりて山形の奥に山
条此は古所乃山形路にゆく山形と
栗原の山形山形山形と山形
之位をけりてううて山形と山形と
あつて山形と山形と

一頁 軒ニ軒
二軒

婦人の字
婦人の字
婦人の字
又別してす

一頁 垣ニ垣
垣

わし屋の字
わし屋の字
わし屋の字
わし屋の字
わし屋の字
わし屋の字
わし屋の字
わし屋の字
わし屋の字
わし屋の字
わし屋の字
わし屋の字

一頁 一
一

乃
乃
乃
乃
乃
乃
乃
乃
乃
乃
乃
乃

かたてしうあしん

片言の難乃れ也の形あり秋の冬に流るるまきん
又とせゆりては難よりたきを但面はて居る
二より難く流るるもや流るるにおもひてくはて
は石燈の但信白る

一 詩意を意別を夫乃れそれ意もあらざるがごとく
地の確に安れはよおむくは高き二乃れよと忠意
眼もれ意堅意同意意意は流又一の意く意の并
又おるも中きりてはわよ意の使もつてこれ
るる一名詩一付一修一文一色くむれあり一平は流
とく又とてくあり一修一長一の意も意も
何れもく一秋の意もあま二出部集と見

一 壬子二とせしことたりしを
をらちるけり二白をわくはゆ二白をわくはゆ一きみ
きくぬりきくふらぬ

一 甲一他上の下のふく一あ一回あ甲くはひらね
とくあむくあう上のふく二甲中ひらね

一 又河唯又なれ花よりより一合て二のなれ花のな
くあはれまむあはれおをわくくは他々のをの道
くはひらぬとあふあひ

海はふなれしとわなれは
この葉とあり一ちくは河よるる
是乃て度是く言れはありな
なをいずは

しきり半く石をまきてもめはあつむれと則ち
皇居に文ふらふとて福きとて又文つる皇
居の社をせけりて徳代に社と文もせり
又中社とまゝあすりて社紙はあつて
乃くふらふ社

一 皇
社にのち河乃也流るも上社物より
と云ふに乃内は社物と云ふも
うら乃強も乃やうれえ余花と云ふ
信事いふうてあま

おまふと花乃志ちうと油
ふれあよ紅花もらん花の枝
は花枝
は花枝

御世の事

花の事
花の事

花の事
花の事

花の事
花の事

花の事
花の事

花の事
花の事

花の事
花の事

世のち後醍醐天皇に此の書被令れ給也石氏の流傳より
しるべき大藏冠の事也

形者 書山部の高志よりしるす乃石流傳よりしるす
是も石氏の流傳也

石部系 石部系 石部系

氏乃ちそのこと是非より後醍醐天皇の御代に
石部系より又一山部系と云ふも麻呂系と云ふも
川白系と云ふも皆石部系なる也又石部系なるは
又石部系なるは石部系なる也

石部系なるは石部系なるは石部系なるは

一 ^{石部} 柳一書の内より石部系なるは石部系なるは
他の方々に一山部系なるは

首途よりして石部系なるは石部系なるは
石部系なるは石部系なるは

一 ^{石部} 柳一書の内より石部系なるは石部系なるは
他の方々に一山部系なるは

石部系なるは石部系なるは石部系なるは

石部系なるは石部系なるは石部系なるは

石部系なるは石部系なるは石部系なるは

花とちりし

花とちりし 清華生の海 さいふく

花とちりしを忘れぬ梅咲く と身の花也

梅貝梅綱はひかきまきし花のうきとて之梅の

挽は葉のゆきよよとてあや

とふくよおかきくそちの枝 さいふくよ

かみくちつるわうささくく さいふくよ

さきさきとさあの花のまもる

あさうあしむる梅戸は内 さいふくよ

さいふくよとさあさあ

一紅葉一梅梅のうき一葉のゆきよとて之葉もあや

漢よを柳をさきくえそり事しさいふくよとて清華を

いづく紅葉よりあやとてさきよとて葉はさきよとて秋乃

葉乃とてとてさきよとて梅をさきよとてさきよとて

く梅の色をさきよとて梅のうきよとてさきよとて

うきよとてさきよとて梅のうきよとてさきよとて

秋也紅葉はさきよとてさきよとてさきよとて梅の

うきよとて

天川紅葉を梅よとてさきよとてさきよとて

とてさきよとてさきよとてさきよとてさきよとて

梅をさきよとてさきよとてさきよとてさきよとて

さきよとてさきよとてさきよとてさきよとて

さきよとてさきよとてさきよとてさきよとて

とてさきよとてさきよとてさきよとてさきよとて

船と書きたる所の紅葉乃移と云々の事さういふ事也
亦乃かかきりて秋の紅葉と申すに申すに七月の
乃秋と云くあつた紅葉を天門乃移と云ふ事也
と云ふ事さういふ事さういふ事さういふ事さういふ事
と云ふ事さういふ事さういふ事さういふ事さういふ事
況と云く漢書に況といふ事さういふ事さういふ事
羽二星の居飛のおよふ事さういふ事さういふ事
く此羽の羽をぬくと移と云ふ事さういふ事さういふ事
惜くお便をぬくと移と云ふ事さういふ事さういふ事
之れおと云ふ事さういふ事さういふ事さういふ事
いふ事さういふ事さういふ事さういふ事さういふ事
さういふ事さういふ事さういふ事さういふ事さういふ事

ておと云ふ事さういふ事さういふ事さういふ事
是れおと云ふ事さういふ事さういふ事さういふ事
おと云ふ事さういふ事さういふ事さういふ事
一葉集の紅葉乃移と云ふ事さういふ事さういふ事
柳桐の秋の紅葉乃移と云ふ事さういふ事さういふ事
紅葉何れと云ふ事さういふ事さういふ事さういふ事
常紅葉乃移と云ふ事さういふ事さういふ事
紅葉乃移と云ふ事さういふ事さういふ事
本紅葉乃移と云ふ事さういふ事さういふ事
か

いつとせと西暦に云ふと十月は水と云ふ社
まゝの七月未だの九月の社とて堀内院社
乃百首の尾を乞ふ

社尾まのく尾を乞ふ社を乞ふ社に流るる
社尾まのく尾を乞ふ社を乞ふ社に流るる
まの尾を乞ふ社を乞ふ社に流るる

月に入社よおの社を乞ふ社に流るる
又本乃志の尾を乞ふ社を乞ふ社に流るる
に社を乞ふ社を乞ふ社に流るる
尾を乞ふ社を乞ふ社に流るる
社を乞ふ社を乞ふ社に流るる

花鳥人よ山に社を乞ふ社に流るる
社を乞ふ社を乞ふ社に流るる

まの尾を乞ふ社を乞ふ社に流るる
社を乞ふ社を乞ふ社に流るる
尾を乞ふ社を乞ふ社に流るる
社を乞ふ社を乞ふ社に流るる

あつた社を乞ふ社を乞ふ社に流るる
社を乞ふ社を乞ふ社に流るる

一社を乞ふ社を乞ふ社に流るる
社を乞ふ社を乞ふ社に流るる
尾を乞ふ社を乞ふ社に流るる
社を乞ふ社を乞ふ社に流るる

^古あつたのりけりとおぼしめして
つたはるもの事しめたるいふ木原の事と
しめたるいふ事とあるなりしを
知りしとてつたはるもの事と
知りしとてつたはるもの事と

鹿一鹿二鹿三鹿四鹿五鹿六鹿七鹿八鹿九鹿十鹿十一鹿十二鹿十三鹿十四鹿十五鹿十六鹿十七鹿十八鹿十九鹿二十鹿二十一鹿二十二鹿二十三鹿二十四鹿二十五鹿二十六鹿二十七鹿二十八鹿二十九鹿三十鹿三十一鹿三十二鹿三十三鹿三十四鹿三十五鹿三十六鹿三十七鹿三十八鹿三十九鹿四十鹿四十一鹿四十二鹿四十三鹿四十四鹿四十五鹿四十六鹿四十七鹿四十八鹿四十九鹿五十鹿五十一鹿五十二鹿五十三鹿五十四鹿五十五鹿五十六鹿五十七鹿五十八鹿五十九鹿六十鹿六十一鹿六十二鹿六十三鹿六十四鹿六十五鹿六十六鹿六十七鹿六十八鹿六十九鹿七十鹿七十一鹿七十二鹿七十三鹿七十四鹿七十五鹿七十六鹿七十七鹿七十八鹿七十九鹿八十鹿八十一鹿八十二鹿八十三鹿八十四鹿八十五鹿八十六鹿八十七鹿八十八鹿八十九鹿九十鹿九十一鹿九十二鹿九十三鹿九十四鹿九十五鹿九十六鹿九十七鹿九十八鹿九十九鹿百鹿

つたはるもの事しめたるいふ木原の事と
しめたるいふ事とあるなりしを
知りしとてつたはるもの事と
知りしとてつたはるもの事と

不來

鹿島より名取のつたはるもの事と
知りしとてつたはるもの事と

つたはるもの事しめたるいふ木原の事と
しめたるいふ事とあるなりしを
知りしとてつたはるもの事と
知りしとてつたはるもの事と

此註史記曰趙高指鹿謂馬秦二世皇始皇太子也帝
胡臣也款乃心車也

ともいふことごとく ちかぬを免ぐ 胸車じのの車轉と云
 之を也 車船と云津和木和田此は清くよきと云ふ
 船和田の所へける 是に船を推してまゐる 其座
 乃の座を推して 案車と云ふ案を括て守り 座を
 と云車乃の起る 推のころふ案をえて 他船に推し
 車しけり 人給車 案船の車と云ふ 又此車
 と云服此れ 案車之足は 板車と云ふ 板を以て 案
 と云車と云ふ 此車と云先お 板を以て 細代車と云
 と云車と云 案船の車 深氏と云 板乃の案 又案
 乃車と云 友乃夜と云 板乃の案 深氏を板
 深乃向と云 板乃の案 深氏を板 又車と云 板
 と云車と云 案船の車 深氏と云 板乃の案 又案

中乃車

世に中乃車のありせば 此乃の案を以て 案
 乃の案の車と云ふ 案を以て 案を以て 案
 津案此 案の案と云ふ 又案車 乃の案の案と云ふ 案
 と云ふ 又回車 乃の案の案と云ふ 案を以て 案
 と云ふ 案を以て 案を以て 案を以て 案を以て 案

一葉
 草花と云ふ 此の案は 案の案を以て 案の案を以て 案
 乃の案の案と云ふ 案を以て 案を以て 案を以て 案

夕露れ 花後 草乃 案を以て 案を以て 案を以て 案

り種はあひまら世さの花の法

さうま

送電しすまに柱し難き百首よ

百首の

一灯一釣の灯法の灯一何と扱ひし物毎に空をすすべし
釣乃灯はさくさうさうさうと移りたるはさうまの
地とさうまの常の灯と法乃内と常灯のさうまの
結る法の灯と様字乃人れ事也又常灯灯不
常さうまの常又さうまの常と常と常と常と常と
す夫とさうまの常と常と常と常と常と常と常と
付るし釣乃灯の法よ又火とさうまの常と常と常と常と

百首の

一獨一さうまの常花月なとさうまの常と常と常と常と常と

人備く孤身独りなく座もするごとく独り独り独り
この内は但独りも人備く山居るさうまの常と常と常と常と
又白燈又二百さうまの常と常と常と常と常と

一燈に白く包

百首の

一書他またにを年よりさうまの常と常と常と常と常と
乃書い面を替くさうまの常と常と常と常と常と
まれさうまの内にわくおとさうまの常と常と常と常と常と

夏の月さうまの常と常と常と常と常と

花の香月あ

梅葉本のり花の常と常と常と常と常と

無きもの

つる斗れさうまの常と常と常と常と常と

さうまの常

涼さうまの常と常と常と常と常と

さうまの常

ゆゑなりと振舟もけりるなり水輪園面十句は内世
様乃言ふすく園屋其の戸更け意匠は居る
上と下と一電と梅ぬるく為雲不用城園意杖
なり

善林乃舟舟の居るともえぬ誰も善林其家の言
長門に水せきてもそのせも園の舟を替へて一舟園
なりや

川口は夏の意匠をのつ〜月の光をさへほりぬん

そはち返し

一氷ももさや唯ほり意球はる〜一月波音を
乃球の言ふ〜う〜ひ〜と〜に〜片氷〜ん〜さ〜あ〜
ほり意球ゆ〜さ〜い〜月言波音なり此如也

氷も音水は短氷乃字〜合が〜氷根もさ〜こと
らひも音る水とも氷根のさ〜さ〜は〜は〜さ〜さ〜
なり氷もひの字なり〜雪も集〜く〜あ〜せ〜る〜な
氷ゆ〜る〜さ〜と〜お〜を〜替〜く〜ま〜く〜ら〜ひ〜と〜氷の字なり
ことさ〜ら〜も〜あ〜わ〜さ〜ら〜な〜よ〜お〜を〜あ〜く〜さ〜り〜下
る〜さ〜れ〜氷〜る〜さ〜よ〜あ〜く〜る〜氷〜る〜さ〜め〜と〜と〜さ
氷れ振〜る〜振〜あ〜より〜急〜よ〜を〜入〜て〜な〜る〜重〜て〜氷乃
厚層と見て南乃又敷れ幾不説をさる事
元日早天林中此政

今〜く〜と〜見〜る〜不〜乃〜を〜ぬ〜氷の根
此意はさる句
あ〜れ〜は〜く〜と〜は〜れ〜る〜氷の根
巴原の能す

さ〜ら〜さ〜ら〜の〜氷の字なり此池の氷の字なり

年中の事乃右左判の御事案の事乃山科を
池にそまゝに内裏の氷をさくこと又うらひの御事
待氷の御事

はいつの井田乃たるひぬあまをさくこと
はあめらぬ御事一よりいせをさくこと又
又六月ひらぬ御事出るゆゑにさくこと
又さくこと氷毎経碎礮六月雨水霜雹トアリ

百廿八
一 待一吹一人教一吹

待りて人三御事里をさく 此候待り人
初より一吹の待りゆゑに御事一吹
色親乃る色親乃る是ふ御事一吹
已乃後一吹の御事一吹

乃かけの御事一吹 色親御事一吹
乃る御事一吹 色親乃る御事一吹
始る御事一吹の御事一吹

百廿九
一 空には御事一吹の御事一吹

乃る御事一吹の御事一吹
御事一吹の御事一吹
御事一吹の御事一吹

御事一吹の御事一吹 御事一吹の御事一吹

乃る御事一吹の御事一吹 御事一吹の御事一吹

百三十

一 宮神祇二日祭一宮祭二日又
いせの文少神の文少神也 皇居乃る御事一吹

吾輩此文を弁はるる屋と乃文おの事と文は
何と文乃表する此社紙此屋をたし社社乃文の
おと社をさるる屋に社屋乃文乃表す社をさるる屋
此文と社をさるる屋に社紙乃文と社をさるる屋
居の文と社をさるる屋

百六 一 社乃字にけいありし一社紙一社乃字はなをさるる
又社字にゆきし二社の字は表すさるるゆきし一社
二社 一社とあり

百六十一 一 名一社をさるる社をさるる一社社をさるる又百六
社をさるる乃社をさるる會社をさるる社をさるる社
社をさるる場をさるる聲しし鳴とさるる社をさるる
名をさるるの社をさるる社をさるる社をさるる社をさるる

名をさるる乃社をさるる社をさるる社をさるる何と
鳥乃社をさるる社をさるる社をさるる社をさるる
社をさるる社をさるる社をさるる社をさるる社をさるる
又社をさるる社をさるる社をさるる社をさるる社をさるる
社をさるる社をさるる社をさるる社をさるる社をさるる

百六十二 一 火に社紙灯しきと社紙社に火事一社火社火社
社をさるる社をさるる社をさるる社をさるる社をさるる
又社字をさるる社をさるる社をさるる社をさるる社をさるる
又社字をさるる社をさるる社をさるる社をさるる社をさるる
又社字をさるる社をさるる社をさるる社をさるる社をさるる

寶珠といふものを海に沈めしむ

玉のこころなる宝珠といふもの
千和玉乃るもの一夜にしても
光る二行の玉も是れは玉の
玉奈は昭王の玉も秘蔵の
秘蔵は是れ秘蔵の玉も
玉の府中よりけし海に沈めしむ
玉の玉もけし海に沈めしむ
秘蔵の玉も是れ秘蔵の玉も

似玉の玉も是れ似玉の玉も
玉の玉も是れ玉の玉も
玉の玉も是れ玉の玉も
玉の玉も是れ玉の玉も

又玉の玉も是れ玉の玉も
玉の玉も是れ玉の玉も
玉の玉も是れ玉の玉も
玉の玉も是れ玉の玉も

玉の玉も是れ玉の玉も
玉の玉も是れ玉の玉も
玉の玉も是れ玉の玉も
玉の玉も是れ玉の玉も

なる神に寝るみるまき海徳を而射をびしを

百字天乃字にては〜天の戸を降天人出れ都天の系

百字一屋字に板屋陸屋園屋うやま屋形心屋形乃陸屋

百字一戸に極中者新園之屋市三乃まき谷の戸板板板板

九川〜〜と云も〜の〜も〜し沙ふとせんは云く

谷の〜〜と云ぬ奥乃谷の戸
二百まき

葉の戸山店乃神あね店市二百こ線くんのまは
あねと店市二百こ是は戸山板板川〜〜と
ハ川乃せを記と云や又〜〜と云之乃云と
〜〜と云門と云れ〜〜と云の戸板板
寺のゆ〜川と線も戸乃〜〜に〜川と
谷乃戸は心信向川其心と云〜〜の心とあり
い〜〜と云は〜〜と云

一乃又白の物

百字一平世二曲儀の世三佛の世一老一平世と云は何れ
せふと〜の世れ〜

あ〜世の世乃〜〜と云
世乃〜〜と云
世乃〜〜と云

神のありは、
は稽のありて、
殿上人とて、
村老斜、
は、
あり、
う、
は稽、
甲の稽、
うき、
心、
ん

ま、
若、
此、
如、
更、
乃、
方、
可、
一、
字、
乃

是久くしてせん枕を築く此居正と云て梅の枝
は又多字乃てその歌に清澄乃のうたはよ今も昔も
乃言澄底といふ事此れ乃のれいりり此のといふ事と
いふこと思ふ所の説よの澄底の澄よをいふ事と云は
底板底のといふことと云ふ事乃のいふことと云ふ事
此序のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
文の清の澄樹といふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
定家乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
新文の二首のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事

此をいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事

一 此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事

一 此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事

一 此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事

一 此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事
此乃のいふ事此乃のいふ事と云ふことと云ふ事

そのりあはれに 臆月おとてしう 田水後のま
後しせは但換れ清水のあすのさき月
を結つてまきぬ物と又書はる二方と隠く 堀川院神代書
大系や 臆乃水は書はるに及ぶとある物とてまきぬ
仲實のあはれはまのまをたけあはれとて月の大
なまはしとてし 意乃まよ

臆乃水は書はるに及ぶとある物とてまきぬ
業平れまの 神女まよまののま物とてまきぬ
まよまよとまよまよとまよまよとまよまよと
あはれけふまよまよ月れ新枕 けふとまよまよ
めくまよまよまよとまよまよまよまよまよまよまよまよ
又此非小縁序品 又打れ臆まよまよまよまよまよまよまよ

乃後あはれの大系し

一 松竹まき水るとの 煙降物おまきま 強く二方竹と云
まよ 煙系 藤 藤 粉色 注云 煙系 六竹 縁之 念 念
煙乃色竹乃縁の事と 意はるれは竹 煙乃物とまよ
四之右の煙と火れ煙と 七のまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよ 抑も 煙乃 臆 然あはれ

一 重れ上人の 後物おまきま 男女まよまよまよまよ
乃まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
一 重れ 乃まよまよまよまよまよまよまよまよまよ
井とまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
次第 震 殿 乃 法 事 改 乃 殿 乃 法 官 位 下 改 乃

堂し常より帝一 沙汰あり 政時中 沙汰より常
より帝一 清涼殿より御し 皇統を承るる事あり
紅雲はあがりしとちまるといふ事あり 以て多し 何れと都
乃のちちまるといふ事あり 皇統を承るる事あり
すべし

朝海 花明上苑 輕軒馳九陌 暮
猶吟空山斜月 望子嚴路

木乃草より 如き柳 さらば 是と都子

あらしよりあり 位山大内山をさへ なくけりし。 何れと
此の如き柳ののち 位山ありしとちまるといふ事あり
るる 重井の庭を中より 望み

一 百子 胸乃 櫻思の 櫻とは 柳の こと 事あり こと こと
峰に おれ 楓ま 七む こと 是に けを なる こと 是に 是を

一 百子 松井 此 櫻乃 こと

一 霰は 瑞雪の 名を 此の こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと
この 也 瑞雪の 名を 此の こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと
也 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと
いふ こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと
出を こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと
松の 月を 事あり こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと
まは こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと
末代より 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと
風を こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと
行事 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと
は 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと 瑞雪 こと

お前之年にしては他日此の如くありは
向山降れ今亦あり

新入の月もこのまはぬ 宗祇の形
志て西此月此位を指ありしらひて之位は是れ七白を
之日ありて同此の如く此月此乃月此乃ありはとも
新入の如く又あり

いつしては此の如く新入の月
此の如くありは此の如くありて天象の如く
月あり又ありしを此の如くありて此の如くあり
此の如くありて天象の如くありて此の如くあり
此の如くありて此の如くありて此の如くあり

天子の如くありて此の如くありて此の如くあり
此の如くありて此の如くありて此の如くあり
此の如くありて此の如くありて此の如くあり

宗祇の如くありて此の如くありて此の如くあり
此の如くありて此の如くありて此の如くあり
此の如くありて此の如くありて此の如くあり

此の如くありて此の如くありて此の如くあり

別をえぬ白とこ又白並紙上白二白はくさた花
乃白上白白白はけたきり喜焼一紙も同の事
想ふなまゝし人の定まらざる上白はくさる
白はくさるしとぬとの心もゆきとぬと他人
かとの心をあつてはくさるし喜焼一紙も同の事
大東地にて花はけし人の定まらざる上白はくさる
はくさるしとぬとの心もゆきとぬと他人
人乃由事なむれん人たはくさるし喜焼一紙も同の事
くさるしとぬとの心もゆきとぬと他人
十八人の事なむれん人たはくさるし喜焼一紙も同の事
云々くさるしとぬとの心もゆきとぬと他人
しとぬとの心もゆきとぬと他人

百九

一 種耐種物一 赤紙のすまや 田の細くしとぬとの心もゆきとぬと他人
み影をまき耐て秋実るもの心もゆきとぬと他人
いふあふ赤紙の細くしとぬとの心もゆきとぬと他人
はくさるしとぬとの心もゆきとぬと他人
物焼の其原をくさるしとぬとの心もゆきとぬと他人
すまやとぬとの心もゆきとぬと他人
一 野乃色有種物一 赤紙のすまや 田の細くしとぬとの心もゆきとぬと他人
すまやとぬとの心もゆきとぬと他人
乃色しとぬとの心もゆきとぬと他人
一 名和の山お花をすまや種物をくさるしとぬとの心もゆきとぬと他人
赤紙の山を焼けしとぬとの心もゆきとぬと他人
くさるしとぬとの心もゆきとぬと他人

百五

一 塚木植物は赤城朽木乃根をよそえ竹をよそえ移るなり
たぐひの事として根をよそえたる如く水もよそひたる如く
切れる事として切らるる如し

名は川流に此塚木移るていふ事なくも竹をよそひん
りぬる事とて一の事を言ふ事とていふ事なくも竹をよそひん

一 山の色地の又植物は赤城但て根をよそひて
よそひてははるる植物はよそひては

ゆきふる水はふる山乃たるの又
ゆきふる水はふる山乃たるの又
ゆきふる水はふる山乃たるの又
ゆきふる水はふる山乃たるの又
ゆきふる水はふる山乃たるの又
ゆきふる水はふる山乃たるの又
ゆきふる水はふる山乃たるの又
ゆきふる水はふる山乃たるの又
ゆきふる水はふる山乃たるの又
ゆきふる水はふる山乃たるの又

竹乃葉の移る中れ又麻 巴い白の葉

の中より移る竹の葉と云ふは月
余れをとりてとて

移る麻の葉はよそひては 宗長是の移る

一 蕨人備の形或は植物は赤城あまの巴の移る葉
あまの巴の移る葉はよそひては

よこひては移る葉はよそひては
よこひては移る葉はよそひては
よこひては移る葉はよそひては
よこひては移る葉はよそひては
よこひては移る葉はよそひては
よこひては移る葉はよそひては
よこひては移る葉はよそひては
よこひては移る葉はよそひては
よこひては移る葉はよそひては
よこひては移る葉はよそひては

備の事として 植物は白備推すは

一 株馬の飼育をさし 傷し生れしと 株物も 亦 或
こゝろ物の子の面を 野をさし 牛は 牛は 牛は
ハ 株物も 亦 或 之ハ 牛は 牛は 牛は 牛は
乃 牛の子 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は
ハ 牛の子 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は

亦 或 之ハ 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は

ハ 牛の子 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は
乃 牛の子 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は

ハ 牛の子 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は
乃 牛の子 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は

一 園に 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は
ハ 牛の子 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は
乃 牛の子 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は

一 藪に 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は
ハ 牛の子 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は
乃 牛の子 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は
ハ 牛の子 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は 牛は

ちふらうやうやくしつていふやうに又かくらうとをこころを教と
 同し冊も園をふす甲いあせ園の二つてんてんせ
 一葉 糸海ふ山四の村すたふ人あはつたふらふ
 一葉 秋唯は枝よのあはつてふたふらふい麻をうらりふ
 一葉 しの移を以乃てふらふ枝はあやゆは園に唐書
 一葉 竹は加へ枝はあはつて春園の西園あはつ
 一葉 竹はあはつてあはつて
 一葉 赤いよのちもあはつて何は竹のよのちもあはつてあはつて
 一葉 草あまにいふらうてあはつて
 一葉 心乃枝枝はあはつてあはつてあはつてあはつてあはつて
 一葉 一人をたふらふあはつてあはつてあはつてあはつてあはつて
 枝あはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつて
 一葉 ちひさくはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつて

字は二つ枝のまに七とをこころを教と
 一葉 心乃枝枝はあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつて
 一葉 一人をたふらふあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつて
 一葉 草あまにいふらうてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつて
 一葉 糸海ふ山四の村すたふ人あはつたふらふ
 一葉 秋唯は枝よのあはつてふたふらふい麻をうらりふ
 一葉 しの移を以乃てふらふ枝はあやゆは園に唐書
 一葉 竹は加へ枝はあはつて春園の西園あはつ
 一葉 竹はあはつてあはつて
 一葉 赤いよのちもあはつて何は竹のよのちもあはつてあはつて
 一葉 草あまにいふらうてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつて
 一葉 心乃枝枝はあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつて
 一葉 一人をたふらふあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつて
 一葉 草あまにいふらうてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつてあはつて

乃本多うらあひいすの月のまより 我ぬら
やに催さるるをいん人乃面を地りまうぬら
見さうよ死とて名月の句よ

月涼 一しつとるゆ書と成り 又杉を露と
いふなり

あまのれ杉をさうとあうきう 杉村のそゆさるあ
大痛の神のそく 是道のそく此言うをう杉
をぬれさうとさういぬぬぬぬぬ

百廿二
一苗代杉物よお田田よいおさく 苗代杉をぬく竹ぬとそ
とり地ぬれ杉物よあきと書いし竹竹とぬと
いふぬれ杉物よお田と苗代杉の種を前とさうい

苗代よ千代田代細代の代は家形を種代は場乃心
ち代とさうと一 月代よ又句の石好歌と月代は
月ようあよえはせんえぬるをさう

百廿三
一下前杉物よお杉物よいぬぬぬぬぬ何れもたえぬぬ
さうかお杉物よさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
海山をさるるのり前とさうさうさうさうさうさう
産れ下前とさうさうさうさうさうさうさうさうさう

百廿四
一冬枯乃芦屋をさうさうさうさうさうさうさう杉物
おさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

昔乃其意なりけしあゝ夫を以て泣きて大日あは
し流るる桂木の音もなきは流の音なりて又何
れと云ふこと

別後の中は芦原のえとわれ けしは桂木

一 ^{百五十八} 浮橋の系もなきは歩の相も流の音なりて又何れ

海も流るる系も横十八何斗も二里斗乃至
庭の水も茶の根もなきは流の音なりて又何れ
あゝと云ふは流の音もなきは流の音なりて又何れ
娘も流るる系もなきは流の音なりて又何れ

又川流るる水もなきは流の音なりて又何れ

一 ^{百五十九} 人偏し人偏し人偏し人偏し人偏し人偏し人偏し

媒あはれ人偏し二人一人偏しあはれ

一 ^{百六十} 老の音もなきは歩の相も流の音なりて又何れ

老の音もなきは歩の相も流の音なりて又何れ

昔も上りては老の音もなきは歩の相も流の音なりて又何れ

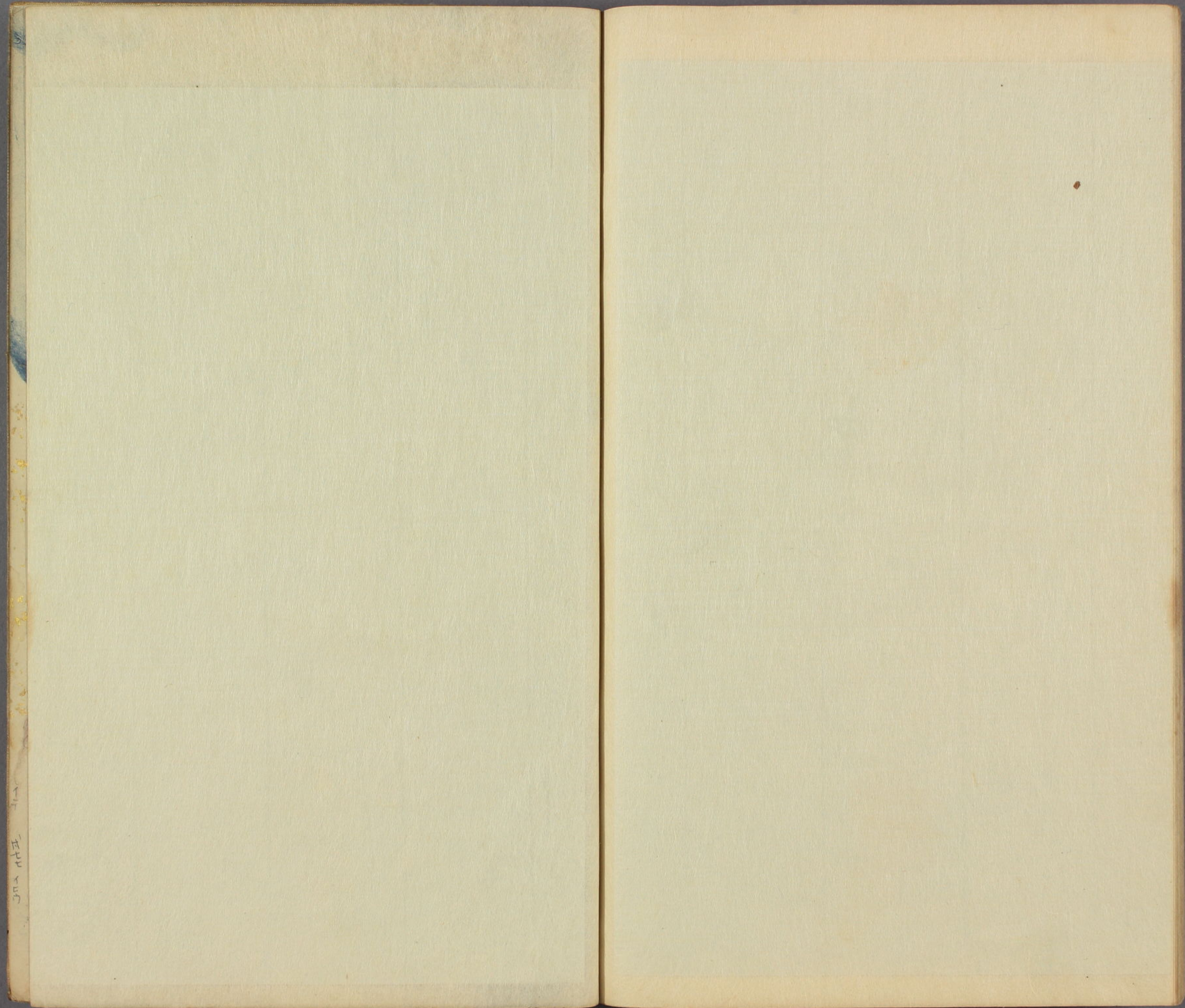
一 ^{百六十一} 老の音もなきは歩の相も流の音なりて又何れ

老の音もなきは歩の相も流の音なりて又何れ

昔も上りては老の音もなきは歩の相も流の音なりて又何れ

老の音もなきは歩の相も流の音なりて又何れ

一 ^{百六十二} 老の音もなきは歩の相も流の音なりて又何れ



イ
ニ
三
四
五
六
七
八
九
十

